



27:27 十四日目の夜になり、私たちはアドリア海を漂っていた。真夜中ごろ、水夫たちはどこかの陸地に近づいているのではないかと思った。

27:28 彼らが水の深さを測ってみると、二十オルギヤであることが分かった。少し進んでもう一度測ると、十五オルギヤであった。

27:29 どこかで暗礁に乗り上げるのではないかと恐れて、人々は船尾から錨を四つ投げ降りし、夜が明けるのを待ちわびた。

27:30 ところが、水夫たちが船から逃げ出そうとして、船首から錨を降ろすように見せかけ、小舟を海に降ろしていたので、

27:31 パウロは百人隊長や兵士たちに、「あなたたちが船にとどまっていなければ、あなたがたは助かりません」と言った。

27:32 そこで兵士たちは小舟の綱を切って、それが流れるままにした。

27:33 夜が明けかけたころ、パウロは一同に食事をするように勧めて、こう言った。「今日で十四日、あなたがたはひたすら待ち続け、何も口に入れず、食べることなく過ごしてきました。

27:34 ですから、食事をするよう勧めます。これで、あなたがたは助かります。頭から髪の毛一本失われることはありません。」

27:35 こう言って、彼はパンを取り、一同の前で神に感謝の祈りをささげてから、それを裂いて食べ始めた。

27:36 それで皆も元気づけられ、食事をした。

27:37 船にいた私たちは、合わせて二百七十六人であった。

27:38 十分に食べた後、人々は麦を海に投げ

捨てて、船を軽くした。

27:39 夜が明けたとき、どこの陸地かよく分からなかったが、砂浜のある入江が目に残ったので、できればそこに船を乗り入れようということになった。

27:40 錨を切って海に捨て、同時に舵の綱を解き、吹く風に船首の帆を上げて、砂浜に向かって進んで行った。

27:41 ところが、二つの潮流に挟まれた浅瀬に乗り上げて、船を座礁させてしまった。船首はめり込んで動かなくなり、船尾は激しい波によって壊れ始めた。

27:42 兵士たちは、囚人たちがだれも泳いで逃げないように、殺してしまおうと図った。

27:43 しかし、百人隊長はパウロを助けたいと思い、彼らの計画を制止して、泳げる者たちがまず海に飛び込んで陸に上がり、

27:44 残りの者たちは、板切れや、船にある何かにつかまって行くように命じた。こうして、全員が無事に陸に上がった。

パウロは百人隊長から尊敬されるようになり、またその信仰ゆえに乗組員たちをも励まして、みな生存のために最善の道を示しました。

クリスチャンはその神様からの使命ゆえに、この世の不信者の人々の中にあっても、指導的な働きをすることがあります。それはあくまでも、自分が尊敬されたいというような自己満足のためではなく、主の栄光のためです。

そのような状況に立たされることがあったなら、主のために、主に祈って聞きつつ、謙遜にしかし確信を持って手腕を発揮しましょう。

この世は社会的にはクリスチャンもノンクリスチャンも同じ環境で生きており、同じ苦難を味わうことがあります。世の人々が希望を失っている中で、主に従うクリスチャンはその使命ゆえに、

確信と希望を持っています。それを人々に示しましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

